

Procedure time for gastric endoscopic submucosal dissection according to location, considering both mucosal circumferential incision and submucosal dissection

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-05-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小沼, 宏徳 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2002203

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 乙第 2398 号

Procedure time for gastric endoscopic submucosal dissection according to location, considering both mucosal circumferential incision and submucosal dissection

(胃腫瘍性病変に対する内視鏡的粘膜下層剥離術における粘膜全周切開と粘膜下層剥離からみた部位別治療時間の検討)

小沼 宏徳 (こぬま ひろのり)

博士 (医学)

論文内容の要旨

内視鏡的粘膜下層剥離術(endoscopic submucosal dissection; ESD)は早期消化管新生物の正確な組織学的診断を可能にし、再発の可能性を最小限に抑える病変の一括切除を容易にするために導入された。ESDにおける手技上の難易度は特に胃病変において、病変の位置および血管分布、潰瘍、瘢痕および線維化の存在によって変化する傾向がある。これらは、穿孔や致命的な出血などの術中合併症の危険性を決定する要因である。また ESD では、粘膜全周切開および粘膜下層剥離の 2 つの重要な段階が手技の難易度を規定する。これまでの研究では胃を上部、中部、下部の 3 領域に分けて処置難易度が検討されてきた。我々は 3 領域では ESD 難易度を分類するためには不十分であると考え、この研究において、難易度が異なるとみなされるすべての状況を議論し、新しい領域として分類した。さらに、各領域の処置時間から粘膜全周切開速度 (circumference incision speed; CIS) および粘膜下層剥離速度 (submucosal dissection speed; SDS) を算出し、比較検討した。

本研究では、自分たちの病院で ESD トレーニングプログラムを完了した 10 人の術者が施行した胃腫瘍の一括治療切除症例 302 例を対象とした。周囲粘膜の状態、病変の血管分布、粘膜下の脂肪の存在、潰瘍、瘢痕、線維化、およびスコープおよび処置具の操作性といった複数の基準に基づいて、12 の領域に分類した。12 領域の CIS と SDS を比較すると、それぞれに有意差が見られ ($p < 0.01$)、この分類システムの妥当性が実証された。また、CIS と SDS を「fast」、「moderate」、「rate」の 3 グループに分類すると、いくつかの領域では、CIS と SDS は互いに難易度が一致していなかった。「fast」、「moderate」、「rate」のグループ間で CIS と SDS をそれぞれ比較すると CIS では各グループ間に有意差が認められ ($p < 0.01$)、SDS では「moderate」と「rate」のグループ間には有意差を認めなかった ($p = 0.424$) が、「fast」と「moderate」の間には明らかに大きな差が認められた ($p < 0.001$)。

本研究は、ESD における処置難易度が異なる領域を新たに分類し、その領域ごとの CIS と SDS を比較した初めての報告である。考えられるすべてのシチュエーションの領域を列挙して統計学的有意差を得ることができたため、この分類の妥当性を示すことができた。また今まで粘膜全周切開と粘膜下層剥離は一つの ESD 手技として考えられていたが、領域ごとに粘膜切開と粘膜下層剥離の処置速度を算出し比較するとそれぞれで順位が異なっており、部位によって切開、剥離の難易度に解離があることを示すことができた。